

津田昇平教話 第二三話

令和三年一月二三日 朝の教話



神様には、大きいことと小さいことという

区別はない。

おはようございます。令和三年一月二十三日をお迎えいたしました。

今朝も目覚めのおかげを頂いて、新しく一日のスタートを迎えることができ、神様からそれだけ天地のお恵みを頂いて、今の今も、生きることができ、おかげの中に生まれて、おかげの中で生活をさせて頂き、おかげの中に死んでいくわけですけれども、おかげの中で今も生活をさせて頂いて、それぞれ、持ち場立場で過ごすことができているということは、ほんとに神様の深いご慈愛じあい、大きなご慈愛、深いご慈愛の表れそのものだなあと、そのように思わせて頂きます。

教祖様のご理解に、

大きいことはお願いし、このくらいのことは構わないと  
いうことはない。神には大きいこと、小さいことの区別  
はない。何事にも神のおかげをいただかなければならな  
い。

『天地は語る』 一七三

とご理解がございます。

大きいこと、小さいこと。つい、特別な事柄が起こってくると、日々の  
暮らしの中で、それが大きいことのように感じてしまいますね。まあ大

きなイベントのように感じてしまう。「小ねらいじよ」って言うんですけど、日々のことなんでしょね。つい当たり前になりがちなこと。できて当たり前だったり、普通に事が進むのが、ごく自然なことのように思ってしまうこと。朝、目が覚めることもそうだし、食事を頂くことができるのもそうだし、お風呂に入ることができるようになるのもそうだし、用を足せるのもそうだし、目が開くのもそうだし、歩くことができることもそうだし。家族がいるということが、当たり前のように思ったりね。仕事があることが当たり前のように思ったり。

そういう一つひとつをよく考えて、よく目を凝らしていくと、どれも大きなことなんですけどね。でも、余程おかげを頂き過ぎて、ぬるま湯

に浸かってしまっているような感覚になるのか。お風呂に入った時は「あったかいなあ」と思っても、だんだん時間が経てばぬるく感じてしまうようなね。そうすると、当たり前前になってしまつて。

そんな中で大きな出来事があると、「神様によくお願いして、おかげを頂こう」ってなるわけですよ。それはちょっとした非日常なんですよ。年に一回や二回、あるいは人生に一回や二回とかね。そういうイベントであつたり。学生であれば定期考査であつたり、受験であつたり。あるいは、もっと小さかつたらねえ、入学とかもそうかもしれないし、運動会もそうかもしれないし、コンクールかもしれないし。あるいは、大きな病気になつたとか、怪我をしたとか、事故に遭つたとか、就職と

か、仕事のミスとか、新しい事業を立ち上げるとかね。あるいは、子どもを授かるとか。

日々の暮らしで、それが毎日あって当たり前というよりは、時々そういうふうに、生活の中でアクセントになるような出来事があると、特別なことで、大きいことのように感じてしまいますね。それはそれで神様をお願いして、おかげを頂かんといかんです。どんなこともね。

けれども、「大きいことはお願いして、このくらいのごことは構わないということはない」と仰る。大きいことはみなお願いするっていうことを仰ってるんでしょうね。でも、「大きい」と言ったら、「小さい」というふうに、対比で出てきますけど、「理解の中では、「大きいことはお願



いって、「このへららのことは構わなからこのことはなら」と仰って。で、「神様には、大きいこと、小さいことの区別はない」と仰るんですよ。そうなんでしょうね、ほんとに。「何事も神様のおかげをただかねばならない」。

考えてみたらね、「このへららのことってまあつい考えがちなこと、当たり前のように考えることってどうのでも、そういうものってどうのとは、実は暮らしの中の根本こんぽんであって、土台どたいになってるもんですから、土台が崩れていくと、大変なことになるんですよ。土台ですから、しっかりとしてるわけですよ。けれども、その土台が崩れた時っていうのは、大事だいじになりますよね。上に立ってるものが、みんな崩れてしまいますし、バ

ランスとれなくりますでしよう。

食事を頂くことができる。これだって頂くことができなくなったら、これまた大変ですよね。目が見えて当たり前で、試験があったり、就職したり、勉強したりね。育児したり、家事したり、これ目が見えるからしやすいことが多々あります。目が見えなくてもできることではあるかもしれないけれども、やはり不自由であることは確かでしょう。手足があることにしてもそう。できて当たり前のように思ってる。でもこれ、できなくなったら大事おおいこですよねえ。お手洗おおいこに行つて用を足せる。これできなくなったら大事おおいこなんですよねえ。でも、そういうことほど、おかげを頂けなくなった時っていうのは、これ本当に大変なことです。

だから、大きいことはお願いするのはもちろんのことやけれども、このくらいのことは構わんというふうにして、思い込んで、誤解して、そういう自分がついつい、これは当たり前やと勘違かんちがいしてしまう。そういう自分のぬるま湯に浸かってしまう、そういう自分に騙だまされてしまうよ  
うなね。寝ぼけてしまつとるんでしょうねえ。で、そういうことないよ  
うに、しっかり目を覚まさんとあきませんね。当たり前のことなんて、  
何にもないんやという。

私、金光教学院に行かしてもらってる時に、同じ班の方にね、ずいぶんお年寄りの方が、一緒に来られましたね。で、まあ同じ班でお話をす

る機会もあったもんですから、この方の身の上の話なんかも聞かしてもらいました。で、いろんなところでお話もされているようなことなんで、別に隠すということでもないんでしょ。

その方はまあ元気そうなんですよ、とてもね。元気そうにされてる小さなおじいちゃんでしたけど。とても元気そうで、ニコニコしてはったんですけどね。ある時、学院の中でも、スポーツをする時があったんですよ。何かその時は、バレーボールかなんかをしてたんでしょね。で、そうするとまあ、おじいちゃん、おじいちゃんって言っても、まだ六十代くらいですかねえ。おじいちゃんというのは、あれですね。六十代、七十代ってなかったか、まあそう考えたら、そんなに年寄りでもなかった

んでしよう。私がまだ二十代の真ん中ぐらいでしたんで、ずいぶんお年を召めされているように感じましたけど、雰ふん囲い気きがね。六十代後半くらいだったと思います。退職して入って来られたんですけどもね。

で、バレーボールのボールが来たんですけど、その方がレシーブして受け取ろうとしたんですよ。受けたんですよ。で、ボールが強く跳ねて、腕のところを受けたんですよ。別に何事もなかったんですけども、そんな時、「あー、イテテテテッ」とか言って、痛そうにされてた。小指とかそういうふう、傷みやすい所というよりは、ちゃんと構えもしてましたし、こう、手首とひじの間って分かりますよね。手首とひじの間ぐらいなんで、そんなにこう大きく怪け我がをするような場所ではない。

比較的、骨としても丈夫かなという感じではあったんです。

ところがまあ、後になってくると、どんどん腫はれてきましたね。で、腕も上がらんようになってきた。その方が、「やっちまったなあ、やっちまったなあ」みたいなことを仰ってた。これ言つて、どこの話かなあと思つたら、「バレーボールでレシーブを受けた時に、これ折れてるなあ」つてことを仰るんですよ。エーッて思ったんですけども、その時に、「遺伝の病気で骨が折れやすいんです」って言われたんですね。エーッと思いましてねえ。ああ、そういうのがあるのかと思ひまして、「ああそんなんですか」、「だからよく、普通の人では折れるようなことがないことでも、ちょっとしたことでも折れるんです」つて。「だからこれまで何十回

も折れてるんです」「って。「へえー」って、またびっくりしましてね。

自分の経験だけで考えたら、ここはまあ折れたりはしないやろうとかね。なんか弱い部分とか、こう強い刺激があっても、出っ張ってる所とかであればね。まあ、それこそ足の指とか、手の指とかね、くるぶしとか、なんかそういうちょっと硬くて、ぶつかったり、ガーンって当たったりとね、衝撃が強く感じますから、イタタタ……っていうことはあるんですけども。でもまあ手首とひじの間で、真っ直ぐな所でね、真ん中ぐらいやったんですよ。あんまりここがこう、ポキンと折れるというふうなことっていうのは、あんまり考えにくかったんですよね、私は。

でもその方が、遺伝的に骨が折れやすいと。で、これまで何十回も折

れてきたと言ってもう、エーッと思いまして、「そういうのがまああるのかもしれないなあ」と思いながら、あんまり詳しくは知らなかったんですよね、その時。で、結局、職員に連れられて病院に行かれて、やっぱり骨折したっていうことなんですよね。その時のことを、時々思い出すんですけど、やっぱりこういう普通にこういう歩けるとかでもそうなんですけどね。

あ、そうそう、その方が普通にこういう歩いて、転んだりするだけで、それでも折れると。小さい時からそうやったらしいんですよ。で、まあ子どもやから走りたくなるとか、遊びたくなる。でも、それでも折れる時は折れてしまう。だからあんまりスポーツせんようにとか、無理せんよ



うにって言われるけれども、でも、動かさなかったら、筋肉は衰えるおとろし。  
かと言って、したいと思ってるようでは折れるし……って。なかなか難しいですよねえ。「年取って、そんなもうワイワイやるうという気はない」って仰ってました。「そやけど、やっぱり若い時は辛つらいかったですね」ってことやって。「そらもうそやなあ」と思いましたね。特にまあ、男の子ですからもう、わちゃわちゃ友達と遊んだりとかねえ、やりたいこともあったでしょうけど、皆がしてる時にできないというものねえ、それから子どもながらも辛かったやろうなあとは思ってますけれど。

でも、「ああ、そういう病気もあるんやなあ」と思いました。またこれがまあ、遺伝的なことですから、治るといってもありませんね。こ

れからごんごん年を取られて、健康な体の方でも、年を取られたらね、少し転んだら折れるとかっていうことだってよく聞きますから。それを思うと、こっから先のこともほんとにおかげを頂かんといかんということを抑っておられました。

そんな時に、当たり前というふうなことってというのは、やっぱりないんやなあということを思いました。自分の中での当たり前前のように思っている事柄ってというのは、それでちょっとこう、ガラッくずと崩れますよね。やっぱり、崩れましたよ。

骨が折れるとか、折れないって、私も二、三回折れたことあります。で、折れたらやっぱりね、大事だいじです。だって生活に支障ししょうきたしますしね

え。それが右手だったり、左手だったり、ま、やっぱり手足が多いかもしれませんが。でもやっぱり大事おおいですよ。痛いし、まあ生活しにくいですしね。

でも、当たり前のようにして、普段思っているということ、自分自身でもやっぱり感じましたし、で、ちょっとした衝撃でしたねえ。おじいちゃんおじいちゃんは、ににににににににされてましたよ。ににににににににして笑いながら、「母ちゃんお母ちゃんに叱しかられる」なんてな感じで仰ってました。奥さんに言ったら、奥さんにも「また、あんた」みたいな感じで言われるなあ……とか言って笑ってましたけど。で、子どもに遺伝せんようにと願ねがってお願いして。

今やったらね、遺伝子とかいうて、DNAとか調べることは……まだ

二十数年前は、そこまでしてDNAで調べてっていほどの医療の感じも、まあないわけじゃなかったんかもしれませんが、まだまだそこまで発達はしてませんでした。だから、そのことも少しこう気にされたりしておりますけれど、でも今のところ、子どもさんたちお二人いらっしゃるにしても、皆、成人してるけれども、まあ元気やから大丈夫やからなあと思って、おかげ頂いてると思ってるということを抑ってました。

まあ何が言いたいか言いましたらね、こう普通に生活してて、これが当たり前やなあと思うようなことでも、ほんとはすごいおかげを頂いてる。それを、思った通りの健康のおかげが頂きたくても、願っても、如何いかに

ともし難い<sup>がた</sup>定めの中で生まれたり、暮らしたりするっていうことはあるわけだね、その方のように。そうすると、自分が今頂いている健康のおかげ一つとっても、これほんまに当たり前じゃなくなって、ありがたいことなんやなあいうことを、やっぱりこう思います。せいぜい日々の暮らしの中で、調子が悪くなったりとかね。そんな時にはやっぱり体を壊したりすると、「健康って大事やなあ」と思うっていうことはありますけれど。

だから、大きいことっていうことはお願いはするにしても、日々過ごさせて頂いてること、当たり前前思ってることでも、本当はやっぱりどれもおかげ頂かんといかんことなんですよね。それがなくなったら、や

っぱり土台から崩れる。だから何なりと、どんなことでも神様をお願いして、当たり前と思わずにね、お願いして、神様のおかげを日々頂いていくということが大事なんでしょうね。

ちょっとしたことのようにでも、でもそれ、おかげ頂けなかったら大事件になるんですもん。当たり前と思うようなことほどね。だから、朝目が覚めて、「今日も一日お守り下さい」ということ。お願いするって言うても、これも大きなことやし、寝る時に、今日一日のことのお礼申し上げて、「寝てる間のこともお守り下さい」とお願いする。寝てる間はもうほんとに無防備ですしね。でも、寝てる間でも神様はお働き下さって、呼吸もさして下さってね。消化もして下さって、で、目覚めさせて下さ

る。自分だけじゃない。家族、子どものことであつたりとかね、というところに至るまで、やっぱり神様のおかげを頂かんとあきません。

寝ている間に、目が覚めたら死んでることだつてやっぱりあるんですもん、実際にね。そういう方のお取次とりつぎもさして頂いていたことがあります。「もうほんとに健康でねえ、二十代の息子が」つて言つて、元気でど仰つてるような、そんなことでも、朝、目が覚めたらもう冷たくなつてたつていうのんでね。「もうほんとに健康でもう、病気一つしないつていうくらいの子が、そんなふうになつて……」つて、そういうふうなこともありましたね。

そう考えたらほんとに、目覚めるといふのはあつたつていふであら、

歩くことができることもそうだし、どんなことも神様のおかげを頂いて、それ自体がほんとにすごいことなんですよね。それがなんか当たり前のようにして、何か勘違いかんちがしてるんでしょなあ。そないならんようにしたいもんです。その方が絶対幸せですよ。これ、一個一個ありがたいなあ、ありがたいなあと思えた方が、そら幸せですよ。ベースがありがたいことなんですからね。大きいことがあってありがたいじゃなくて、日々のことがありがたいんやったら、もう何してても結局ありがたいんですもん。で、実際そうなんですよね。失ったら分かるんですよ。まあでも、信心させて頂いてる中で、気付かせて頂くことが、機会が多いわけですから、やっぱり神様に日々、恵んで頂いてるっていうこと



を忘れんようにね。恵んで頂いて、その恵みを受けて、頂いて、辛うじて  
生きさせて頂いて、存在させて頂いている。それだけの弱い立場ですか  
らねえ。

だからほんとに、毎日毎日、恵んで頂いてありがとうございます。住  
ませて頂いてありがとうございます。食べさせて頂いてありがとうございます  
います。生きさせて頂いてありがとうございます。雨風凌ぶがせて頂いて  
ありがとうございます。自分だけやない、親も、兄弟も、子も、皆おかけ  
頂いてありがとうございます。ありがたいことばかりで、ありがとうございます  
ございます。お天道様てんどうさま、お照らし下さってありがとうございます。雨が  
降ってありがとうございます。蛇口びいもくひねったら水が出て、ありがとうございます

ございます。コンセントに挿さしたら電気がつく、ありがとうございます。何でも当たり前のことなんてないんですよ。

今日は今日でまた、神様から私たちが生きる上で必要なものをぜーんぶ恵んで頂いてますんで、あまりに大き過ぎて忘れがちですけれどね。でも、そこを素通りするんじゃないくて、立ち止まって、大事に大事に、丁寧ていねいに生きるということは、一つひとつの事柄を素通りせず、できる限り立ち止まって、お礼を申し上げて、神様に感謝して。

でも、大事なことは、そこを喜ぶということ。喜び上手のお礼上手になっなっていききたいですね。喜び上手のお礼上手。それが信心させて頂くと

いうことなんですよね。天地の<sup>たいおん</sup>大恩、神様のお恵み、これくらいのごことは大したことやないというわけでもない。目に見えて大きいような事柄、大きいイベントを頂いて、上手くいって、成就しておかげ、という単純なもんでもない。むしろ大事なのは、日々の暮らしの中、何気ないところ、そこが一番<sup>かんじんかなめ</sup>肝心要でね。

人間はおかげの中に生まれ、おかげの中で生活をし、おかげの中に死んでいくんですから、その神様のお恵みを今日も頂いて、その中で暮らさして頂いてるんですから、辛い<sup>つら</sup>、悲しい顔をしてるようじゃ<sup>あ</sup>相済みません。神様にほんとに申し訳ないですからねえ。それだけでご無礼して  
るような気がしますよねえ。そろそろうでしょ。

だからやっぱり、神様は喜ばせようと思って、笑顔が見たくって、おかげ下さってるんですから、喜び上手のお礼上手にならして頂いてね。気になるところやら、先々の心配だって、お互いに人間ですし、凡夫ぼんぶですからあるんですけどね。でも、そこに心を奪うばわれんようにせんとあきませんね。そういう中でも、おかげを頂いてる今を大事にして、喜び上手のお礼上手でさして頂いてると、それ自体が器うつわになりますから、またおかげも頂くことができますね。

せっかくねえ、神様恵んで下さってるのに、皆さん、何かプレゼントしたことあります？ 誰たれかにね。大事な人に何かプレゼントっていつも、喜んでくれてないとかねえ、寂しいもんですよねえ。甲斐かいがない

でもんね。喜んでくれてたら、ああ嬉しいなあ、よかったなあっていう気持ちになりますよ。

神様も人間がかわいくて、恵んで下さってねえ。ありとあらゆるもの、それを頂いてるんですもの、毎日毎日、三百六十五日、二十四時間ね。ほんとに一分一秒に至るまで、ずっと頂いてるんですから。頂き通しなんです。から。やっぱり、「ありがとう」って言います。「言いつて、まあ」ありがとううございます。「言いつときながら、全然顔が笑ってなかったら、それも嫌でもんねえ。寂しいですよ。子どもにプレゼント、誕生日プレゼント」「おめでとう」「言いつて渡しても、「ありがとう」言いつてね、白けた顔して取られてもね、何か、ガクッときちやいますもんね。やっぱりそ

れを喜んでくれたら嬉しい。でも、まあそんなものですよね。プレゼントするんでも、それが恋人であれ、親であれ、何でもそうなんですけれど、同僚いりやの方であれ、何かさせて頂いて、プレゼントするってというのは、やっぱり喜んでほしいんですよ、結局ね。

神様もおんなじでね。やっぱり神様からギフトを頂いとるんですよ、毎日ね。それを毎日毎日、何かしら何か、あ、あ、あもっギフトだからさあ。わ。わ。当たり前になったらあきませんけど、あ、あ、あながらちですけれどね。でも、喜ばせようと思つて、うじ氏子うじこかわいいと思つておかげ下さつてるんですから、やっぱり喜ばんと、神様に申し訳ないですよね。

まあ生きてたらね、気になることもあるでしょうけれど、でも皆おかげ

になったらいいんですから、先の心配はあんまりせんと、今頂いてる、授けて下さってるおかげをよう味わってね。今を大事にして、そこに感謝して、喜んで、過ごさしてもらってたら、先の心配はせんでいいんですよね。いいようにして下さいますんで。それが信心ですからね。またそれを信じるのが信心ですよ。

はい、今日も一日、ごちそう神様と一緒に過ごして下さい。よくお参りでした。

(了)



---

# 津田昇平教話 第二三話

令和三年一月二三日 朝の教話

令和五年六月十二日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五

---



